

# この世界で生きるあなたへ

～国境なき医師団の活動をふりかえって～

河野暁子

Aさん、お元気でしょうか。パレスチナも寒い季節を迎えているかと思いますが、体調を崩されたりしていないでしょうか。私は夕日を見るといつもナブルスの町を思い出します。小高い山々に囲まれたすり鉢状の町は、夕方になると美しいピンク色の夕日に染まっていたね。そんな美しい夕日が沈み、夜が訪れるのは怖かったことでしょう。夜はイスラエル軍が町に入って来て、家々を襲撃する時間でした。あなたの夫も、夜中に突然侵入してきたイスラエル兵に拘束され、それ以来あなたは気分が塞ぎ、食べられなくなり、よく眠れなくなっていましたね。そんな恐ろしい暴力から数カ月後、私たちは出会いました。私は国境なき医師団の心理士として、心理ケアのためにあなたを訪問するようになりました。もう10年以上経ちますね。

私がパレスチナに派遣された当時、国境なき医師団は、ガザ地区とヨルダン川西岸のナブルス、ヘブロンで、イスラエル－パレスチナ紛争による暴力被害者へ、医療ケアと心理社会的ケアを行っていました。パレスチナは苦難の歴史を歩んでいたのですよね（今もその最中だと思いますが）。1948年のイスラエル建国で、70万人以上のパレスチナ難民が発生しました。中東戦争とインティファダを経て、1994年からガザ地区とヨルダン川西岸がパレスチナ自治区として認められていきました。でも、自治区とはいふものの、実際にはイスラエルによる入植地が増え続けていましたね。ナブルスの周辺にもイスラエルの入植地がありました。町に繋がる道路全てに、イスラエル軍による検問所が設置されていたために、ナブルスに入るにも、ナブルスから出るにも、検問所を通らねばなりませんでした。誰もが「天井のない監獄だ」「ガザが大きな監獄なら、ナブルスは小さな監獄だ」と話していましたね。検問所では、移動のできない人と車がいつも長蛇の列を作っていて、パレスチナの人々のやり場のない怒りが渦巻いているようでした。

国境なき医師団における私の仕事は、紛争による暴力被害者へ心理ケアを提供することでした。とはいえ、すべての人に心理ケアが必要なわけではなく、パレスチナの人々は、半世紀以上続く紛争下の暴力に順応しながら暮らしているようにも見えました。町の通りには店が並び、子どもたちは学校へ行っていましたし、時間になればイスラム教のお祈りが始まり、ラジオからは流行りの音楽が流れていました。

イスラエル軍の検問所を通過できない、イスラエル軍が突然道路を封鎖するなどの暴力は、ナブルスの日常になっていましたね。近郊の村からナブルスの学校へ通う学生は、検問所を通過できずに欠席せざるを得ないこともありましたし、急病人の搬送ができず、命の危機にさらされる人もいました。そのような日常に加えて、もっと激しい暴力もしばしば起きていましたね。あなたの夫がされたように、夜中にイスラエル軍がやってきて、パレスチナ人を拘束したり、パレスチナ人の家を滅茶苦茶に破壊したりしていました。目の前で、夫や父親や息子が暴力的に連行される姿を見た家族は、強い憤りとともに、恐怖と無力感を覚えたことでしょう。イスラエル兵の暴力によって、殺されてしまう人もいましたね。自治区とは名ばかりで、イスラエルによる一方的な暴力行為が行われていることを、私はナブルスで目の当たりにしていました。

紛争下の日常的な暴力に順応していた人でも、新たな暴力にさらされると、よく眠れない、食べられない、不安でたまらない、小さなことに過敏になるなど、心理的な反応を示すことがありました。とても怖い思いをしたのだから当然なことですよ。このような反応は、大抵はしばらくすると治まっていきます。国境なき医師団のパレスチナ人ソーシャルワーカーが、暴力被害者やその家族を訪問するのは、暴力発生から数カ月が経ってからでした。その時、心理的な困難を抱え続けているため、心理ケアを受けたいという人に、私のような海外から派遣されてきた心理士が心理ケアを提供していました。私はパレスチナ人通訳と一緒に、相談者と会っていました。Aさん、あなたはそんな相談者のうちのお一人でした。

初めてあなたを訪ねた時、案内してもらったお部屋はとても薄暗く、寒かったのを覚えています。パレスチナの建物は石造りで頑丈ですが、電気や灯油を節約するために日中でも薄暗く、冬は室内でコートが脱げないくらい寒いんですね。あいさつを交わした後、あなたは硬い表情でポツポツと語り始めました。詳しいやり取りは覚えていないのですが、あなたの夫がイスラエル軍によって何度も拘束されていると聞き、私はあなたの恐怖や不安を受け止め、ひとりで子育てをしている苦労をねぎらったと思います。話の途中であなたは、「イスラエル軍による暴力は何度も受けている」と、子どもの頃に負った大けがの痕を私に見せました。「今まで誰にも見せたことがなかった」とおっしゃっていましたね。この日の訪問を終える時、「あなただから心理ケアを受けようと思った。ヨーロッパとかアメリカとかの心理士が来たら断ろうと思っていた」と、あなたから言われました。あなたには、欧米人がイスラエル側の人間に見えていたようです。国境なき医師団はどのような国や政権からも中立を保っているのですが、そうはいつでも、簡単に信用することはできなかったのでしょうか。

たしか、私はあなたを7回くらい訪問したと思います。3、4回目の訪問で、あなたは「好きだった刺繍を再開したの」と、見せてくれました。パレスチナの伝統であるその刺繍は、白地に黒や赤の糸で花や木をモチーフに美しい模様が描かれていました。夫が初めてイスラエル軍に拘束された時も、あなたは刺繍をしながら気持ちを落ち着かせていたとのことでしたね。あなたと子どもが暮らす部屋には花や植物が置かれ、壁は刺繍のタペストリーで飾られるようになり、あなたの表情にも魂がこもってきているように感じました。夫が拘束されている状況は変わりませんし、あなたが子どもの頃に負った大けがの痕も元に戻ることはありません。それでも、凍っていたあなたの生活が溶け始め、再

び息を吹き返していました。最後の訪問で、Aさん、あなたは私に刺繍をプレゼントしてくれましたね。夫が最初に収監された時に作っていたものでした。もちろん、そんな大事なものを受け取るわけにはいかないと私は断りましたが、「どうしてもあなたに持っていてほしい」とのことでした。私はその刺繍を今も大切に持っています。

こうしてあなたにお便りを書いていると、当時の記憶がよみがえってきます。あの頃のナブルスは、パレスチナ人同士の対立も表立ってきていましたね。紛争は目に見える暴力だけでなく、人と人との関係を破壊していくものです。突然夫が連行されたあなたの計り知れない不信任感、孤独感や心細さを、私は改めて感じています。

私は今、紛争下における心理ケアとはいったいどんなものだったのだろうか、ふり返っています。パレスチナでは、心理ケアを求める人々が大勢いました。それには、パレスチナで起きていることを知ってほしい、自分たちの苦しみを世界へ伝えてほしいという思いが含まれていたように思うのです。私は証人になることを求められていたのではないかと考えています。

Aさん、あなたのように自分ではどうすることもできない環境で生まれ、やり場のない怒りや悲しみを抱えている時、世界は不信に満ち溢れていたかと思います。そんなあなたへ、真摯に耳を傾ける者が海を越えてやって来ることは、あなたをエンパワーしていたのではないのでしょうか。紛争下において人と人が出会い、信頼できる関係を紡ぐことは、心理ケアの効果以上に、どれほど尊く意義深いものだったかと感じています。

Aさん、あなたにけっして出すことのないお便りを書きました。

どうかご家族ともどもご無事でいらっしやること、一日も早く紛争が終わり、誰もが笑顔で過ごせる日が来ることを祈っています。



夕日に染まるナブルスの町



イスラエル軍による破壊

\*個人が特定されないよう、Aさんについては省略、改変してあります。